

幼稚園教育におけるコンピテンスの発達

天 野 珠 子

Education on the Kindergarten to Develop Child's Self-Competence

Tamako AMANO

I はじめに

幼稚園教育要領の大幅な改訂（平成2年）より、まもなく10年の歳月が、流れようとしている。6領域のカリキュラムに縛られ、保育内容を寸断し、小学校の時間割的コマ切れ保育に対する警鐘として当時高く評価されたものである。特に総則の1、「幼稚園教育の基本」は、それまでの幼児教育に対する意識を積極的に変換しようとした意気込みが感じられる。しかし現実の保育現場においてどれほどその意図は生かされているのであろうか。今、また幼稚園教育要領の見直しが行なわれているが、真の意図が日本津々浦々の現場まで浸透するには、まだかなりの年月がかかると思わなければならないであろう。

さて今回ここで取り上げようとするテーマは、まだ研究途上のものであり、心理学的研究としては、それなりの実績をあげているが教育的見地からは、それも特に幼児期においては今後の課題とされるものである。幼稚園教育の基本テーマに即した研究でもあるので、その紹介と教育要領との接点、および実践による課題追求を行なってみたい。

※幼稚園教育要領の表示は、現在のものを現要領、平成2年以前のものを旧要領、平成10年11月18日公示された西暦2000年より実施予定の幼稚園教育要領（案）を新要領（案）と略して使用する。

II 幼稚園教育要領にみる重視されたことがら

まず以下に現要領の総則1^{※1}を列記してみよう。

〈第1章 総則〉

1. 幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ環境を通して行なうものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共に

よりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、つぎに示す事項を重視して教育を行なわなければならない。

- (1) 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- (2) 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びをとおしての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- (3) 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行なうようにすること。

（下線は筆者）※新要領（案）によっても、上記の項目には変更なし。

以上のように、至る箇所に従来幼稚園教育が陥ってきた課題中心保育に対する注意が読み取れるのである。しかしここで旧要領（昭和39年）の批判をしようとしているのではないことを述べておきたい。旧要領においても幼児を領域に当てはめ保育するような意図で作成されたものではない。ただ6領域（健康、社会、自然、言語、絵画製作、音楽リズム）が、例えば健康＝体育、社会＝社会科、自然＝理科、言語＝国語、絵画製作＝お絵書きや製作、音楽リズム＝唄や遊戯、というように置き換えられ次第に大がか

りな形や見せるための保育が一部の園において行なわれるようになっていった。「総合的に指導すること」という教育要領の意図から現場の保育が外れていったことに改訂の大きなねらいがあったと思われるのである。またこの傾向は、小学校低学年の理科と社会が、「生活」にまとめられたことをみてもその意図が良く理解できるであろう。

それが端的に示されたのが、5領域の領域名である。以下に5領域名とその観点を引用してみよう。

※新要領（案）による。

「健康」……………健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

「人間関係」……他の人々と親しみ支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。

「環境」……………周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活にとりいれていこうとする力を養う。

「言葉」……………経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉を使って表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

「表現」……………感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

以上のように幼児が環境とのかかわりの中で主体的に活動することによって、それぞれの領域のねらいが総合的に達成されることに重点が置かれ、教師はその活動を個人差を踏まえ適切に援助していくことが望まれているのである。

また今回、5領域の全てに「力を養う」という言葉が入った。ちなみに現要領では、「言葉」「表現」の領域にこの言葉は見当たらない。従来の子どもをその平均的発達段階に添って、教育しようといった観点から、子どもひとりひとりが自ら成長・発達しようとする内的生命力に対する援助という視点になり、そのための環境構成が教師に負わされた課題であろう。

これはとりもなおさず、教師中心主義保育観から子ども中心主義保育観への転換である。我が国にお

いても児童中心主義思想は、大正時代から昭和初期にかけて倉橋惣三氏が「誘導保育」という名のもとに提唱してきたものであるが、戦争と以後の高度経済成長等、時代の波に押し流され、教育学者の間には常に受け継がれながら、なぜか、現場の保育界には中々浸透せず、むしろ受験戦争、エリート意識などの風潮にその火は消える寸前までできていたのではないだろうか。しかしバブルの崩壊、いじめや家庭内暴力など小中学生を巻き込んだ社会的問題傾向や国際交流の必然性など、幼児期からの教育・しつけから考え直す時期となり、総合的教育の見直しとなってきたといえよう。

また子どもの発達観の変換も大きく影響してきたといえる。子ども自らが持つ生きるためのエネルギーに対する心理学的アプローチも見逃すことはできない。次にその見地から問題を見つめていきたい。

III 発達段階の見方から発達課題の見方への転換

発達段階とは、人の発達の变化を幾つの特徴的变化に伴い区分したものである。そしてある段階はそれ以前の段階を確実に経過することによってもたらされるものであり、段階を飛び越えたり、後戻りすることはできないといった捉え方である。フロイト (Freud, S.) の口唇期や肛門期、ピアジェ (Piaget, J.) の感覚運動期、前操作的知能の段階などよく知られている。

従来の保育観では、このような一般的発達段階に到達させることを目標にした捉え方が主流だったといえる。したがって、全体的指導の中で「ねらい」として到達目標が設定され具体的計画のもとに、一斉的に保育がなされる。到達地点にある子は健全な発達とみなされ、到達していない子は、発達の遅れ、あるいは問題児としてはずされることになる。いわば平均的発達段階への到達が保育目標となるような保育姿勢が優勢であったといえよう。

しかし現要領では個人の主体性が尊重され、ある子が現時点での段階から次の段階へ進む前向きな捉え方が随所にみられる。前掲の現要領、総則第1章1.の(3)では「幼児ひとりひとりの特性に応じ、発達の課題に即した指導」とあり、また第2章のねらい及び内容の項で「各領域にしめすねらいは幼稚園における生活の全体を通じ幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向か

うものであること」と述べられている。「……が出来ていない幼児」的捉え方から「次は……に向かい努力する幼児」的捉え方、つまり発達課題的見方といえるのではないか。

発達課題とは、個人のある時期における達成期待を示した課題で、その課題に成功すれば、その個人は幸福を獲得し、失敗すれば他者の不承認や、自己の不幸につながり、次の課題達成を困難にするといわれるもので、ハヴィガースト (Havighurst,R.J) やエリクソン (Erikson,E.H.) の発達課題がよく知られている。指導計画作成上の留意事項においても「幼児が自らその環境にかかわることにより様々な活動を展開しつつ、必要な体験を得られるようにすること」とある。つまり一般的発達に合わせる事が目標ではなく、個人の成長・発達を自身の心情・意欲・態度で可能となす課題追求型への転換といえ、個の尊重である。

積極的前向きに環境に働き掛ける自己教育力の育成が目標となったのである。教師主体の「させる」型保育から子ども主体の「する」型保育への転換ともいえよう。自己効力感、あるいは有能感が子どもを育てる基本であり、そのような「感じ」を子ども達が抱けるような教師の援助が要求されるのである。

IV 教育におけるコンピテンスの意義

1. 外発的動機づけと内発的動機づけ

封建社会における、年令や発達レベルを無視し一方的に教え込む教授法は、戦後の教育においては否定され、レディネス (適時性) を重視し、年令に合ったカリキュラムを作成するようになった。そして教育においては子どものやる気をいかに啓発するか、が指導法における重要な課題となった。これが、教育における「動機づけ motivation」の重視である。動機づけとは、簡単に説明すれば、人はある目標に対して、それをどうにかしたいと要求が起これば、それに向かって行動しようとする、一連の心の動きといえる。従って「勉強をしたい」「学びたい」「知りたい」と個人が動機づけられることが教育にとって大切なのであり、教師はそのような動機づけが子ども達に起こるような教育を考えるべきであるということである。

ところがホワイト (White,R.W.) は、真のやる気は、単に動機づければ良いのではなく、動機づけが、

他者からではなく自分自身からの主体的動機であることが真のやる気につながるのだ、としてそれまでの動機づけを「外発的動機づけ」(典型的パターンとしては、賞罰を条件とした場合など) と命名し自らのやる気を「内発的動機づけ」と命名したのである。またハント (Hunt,J.McV) は、動機づけの力は、有機体と環境との情動的交渉の中に内在しているとい、これを内発的動機づけの意味としている。^{※3}

以後多くの研究からも課題への取り組みや継続時間などの点でも外発的動機づけよりも内発的動機づけの方が、子どもの自発性を高めるといった調査・実験などによる研究発表が報告されている。

2. 内発的動機づけの概念

内発的動機づけ概念が確立するのは1960年以降と云われている。^{※4} 現在そのメカニズムを解明しようとする研究は、内外を問わず多く見られ、多少の見解の相違はあるものの以下の二つに大別されるであろう。

①最適不適合 (optimal incongruity) のアプローチ

ハント (前述)、バーライン (Berlyne,D.E.) らによって推進されたもので、人は最水準の心理的不適合 (ズレ) を維持するように動機づけられていて、それが内発的動機づけの源であるとする立場である。^{※5} ハントは「幼児はそれ以前にいろいろ変化に富んだ物に出会うことが重要であろう。幼児が利用できる物が変化に富んでいればいるほど、幼児は自分の世界の中でますます興味のあるものをもつようになり、そのあといっそう新奇なものに対して興味を抱くような心をもつであろう。」^{※6} 「しかし、新奇さや不調和が大きすぎると恐れが生じ、反対に小さすぎると退屈が生じるという事実は、認知の発達を刺激することを考えている者に対して一つの問題を提起することになる。つまりわれわれは適度の不調和をもった教材や物やモデルとの出会いを考えなければならない。」^{※7} と言っている。

これは、古くはソ連の心理学者ヴィゴツキー (Vygotsky,L.S.) の発達の最近接領域説とある面で共通するといえよう。発達の最近接領域説とは、レディネスは子どもの成熟を待つのみではなく、創りだしていくという捉え方である。そのための教育的働き掛けは、自力で可能な発達水準より、一步先の発達しつつある水準に作用してそれを方向づける、従って現水準の少し上を教師の援助 (環境構成やヒ

ントなど)で与えられると、子どもは、やる気を自ら持ち努力するという。この少し上のズレがハントらの最適不適合とあい通じる点であり、発達課題の見方とも一致するように思う。

②コンピテンスのアプローチ

ホワイト(White,R.W.)が提唱したもので、コンピテンスとは、環境と効果的に関わる生得的な能力をさし、その結果としてもたらされる効力感(feeling of efficacy)を求めるもので、それを内発的動機づけの源とした。^{#8}その後、ド・シャーム(deCharms, R.)、デシ(Deci,e.L.)、ハーター(Harter,S.)、桜井茂男らもその説を推進し人は自分を有能で自己決定的であると感知できるように動機づけられており、これが内発的動機づけの源である。つまり有能で自己決定的ありたいという欲求(need)を内発的動機づけの源と考えるアプローチとしている。^{#9}

③コンピテンスの意義

コンピテンスは片仮名書きで現在は使われることが多い。訳語も有能感の他に自己効力感、有効感などと言われ、どこに比重を置くかでその意味するところにも多少の差はあるが、ここではホワイト(前述)の見解で説明しよう。彼はコンピテンスを「人が環境と効果的に相互交渉する能力」と捉えた。^{#10}つまり人が自分の周囲の環境に働き掛けた結果、その環境の変化が自分に満足のいく結果を与えたという充足感がコンピテンスであるという。そしてコンピテンスが再び次の探索行動を動機づけるのであって、いいかえれば内発的動機づけをもたす元であり、またどのくらい自分が有能に環境を替え得るかの自己評価である。

またコナリー(Connolly,K.J.)^{#11}によれば、コンピテンスは、環境に適應すること(あることを知ること)と環境を変える行動(どうしてか)を意味しているという。もう少し詳細にその意味を説明すれば、つぎの3つのことを含むという。①ある行動経路を入念に定めるために、意義のある情報を与えるような特徴を全体環境から選び出せること。(シエマの形成、プログラムの構成)②行動の経路を計画したならば、次の課題として、自分のために設定した目標を達成するために、一連の運動または活動を始めること。③新しいプランを形成するために、過去の成功と失敗から学んだことを利用すること。

この説を幼児教育の立場から捉えれば、幼児はあ

くまでも主体的自我により動機づけられ、自発的行為(それは往々にして探索行動的)によって実行され、その結果の有能感が再び、新たな環境への能動的活動をうながす、という見解と受けとめて良いのではないだろうか。

V コンピテントな保育

内発的動機づけを重視した教育は、保育界においても従来より模索されてきた。しかしその視点は、先に述べた最適不適合(ズレ)面からのアプローチが優勢であった。子どもの「自分でも出来た」という感じ(コンピテンス)が注目され始めたのは、ごく最近のことである。意欲を高める教育は、従来より重視されてきたが、コンピテンスを重視する理念が、国の教育の基本政策となり具体化に向けて動き出したといえる。この傾向は新要領(案)では一層強調されている。保育が指導者側からの見地で扱われていれば、課題の設定、カリキュラムの重視という視点で子どもの自発性を捉えようとする観点とならざるをえない。

コンピテンスの価値を保育に求めるには、保育そのものへの発想の転換がなされなければならない。これは、心理学や教育学の立場では容易であっても現場においてはかなり抵抗があり、文章として表現はされても、現実的には想像以上に難しい問題であった。なぜなら、現要領の「指導計画作成上の留意事項」には、「幼児の行なう活動は個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであるが、いずれの場合にも一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行なうようにすること」とある。これは、一斉保育か、自由保育かといった形態上の問題ではなく幼稚園における生活の全ての活動において、ということである。つまり子どもにとって望ましいと教師側が思う課題設定保育においても、自由時間における子どもの遊びの中においても、常にそのことが盛り込まれなくてはならないのである。

保育経験のない教育学者達は、具体的事例を明記することはそれ自身すでにマニュアル化に当たるとして、環境という漠然とした表現方法で記すのみとした。「子どもが環境と主体的に関わる」ための環境構成が教師の役目といわれるが、その環境は漠然としていて真にそれがある子どもにとってふさわしい

かどうか、何を以て位置づけるのであろうか。たまたまその子が出会う環境が適切かどうか、教師の眼に委ねられているのである。さらに多数の子どもにふさわしい環境を構成することに難しさがある。たとえ環境が準備されてもその時点がある子にとっては、すでに遅すぎる状態も多々あり得るのではないだろうか。まことに無責任な指導通達と考えることもできよう。

さてそこでコンピテンスの価値が浮かび上がるのである。子どもの自発活動を高め、そこから次の環境を考案する保育計画を考えなければならないといえるのではないか。子ども達が試行錯誤しながらも、自己実現する方向に保育計画を立てていかなければならない。桜井^{#11}は、幼児のコンピテンスを測定尺度にして開発し、受容感→有能感→探索・認識行動という枠組みで分析した。(図1)その結果友達からの受容感は学習の有能感に強く影響し、学習の有能感は探索・認識行動に強く影響するという。また、友達からの受容感は運動の有能感にも同じように影響するが、父親や母親からの受容感は有能感に期待していたほどの影響を与えなかったという。

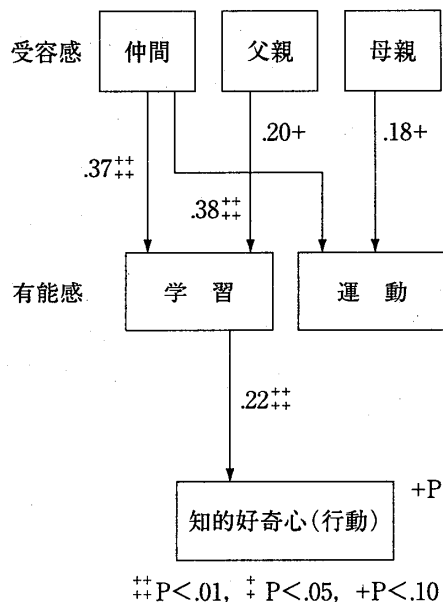


図1. 重回帰線の結果 (パス係数) (桜井、1987)

これらの結果については、まだ今後の研究に委ねなければならないので軽率な結論は控えたいが、幼児教育への示唆は与えられているのではないか。つまりコンピテンスは幼児の場合、仲間と共になすこ

とで教師側の環境構成の価値も大きくなるということは、常識的にもうなずける結果である。個と集団(グループを含む)を含む様々な状況の中で、周囲から受け入れられ、存分な時間、空間の自由が保障されるとき、コンピテントな子どもが形成されるのである。少なくとも従来から継続されている一般的幼稚園教育の保育室における教師主導型の形態と休憩時間的自由時間の枠組みの中では育てにくい課題であることは確かである。

VI 幼稚園におけるコンピテンスを高める保育実践

1. 保育者が援助する環境構成とは

幼児を取り巻く環境としては、物的環境と人的環境がある。物的環境には、施設・設備、教具・教材、そして四季の変化を含む自然環境などが含まれる。しかし物や場所を準備すれば良いというものではない。物的環境が子ども達に刺激を与え、ひとりひとりの子どもがそれらと自発的に関わり自己実現できるかがポイントとなる。簡単な例をあげれば園で動物を飼えば良いのではなく、その動物とどう触れ合うかが問題なのである。餌を与えるだけでなく、糞や腐った餌の掃除、何が好物でどのように食べるのか、動物の死についてどのように感じ、どのように対処するのか、など全てが関わってくる。固定遊具にしても設置されていれば良いというものではないであろう。子ども自身が遊具と関わる中で、次の目標が判るような配慮を工夫するなどが人的環境としての教師の援助である。

ある園での取り組みを紹介すると、子どもが小高い山から飛び降りる遊びをしていた。その遊びはそれのみでは発展はない。しかし保育者が、飛び降り地点に何本かの線を引き、どこまで飛べたか子どもが自ら判るようにした。子どもたちは、飛び降りるだけではやがて飽きてしまうが、到達地点が判るようになると、次はもっと遠くまで飛ぼうと自分自身への挑戦を始めた。そこには友達と刺激しあうという人的環境がある。このようにちょっとした教師の機転で、単純な飛び降りる遊びから、どこまで飛べるかという遊びに子ども達が遊びを発展させていくことができ、コンピテンスを抱かせる経験を増やせるのである。

ごっこ遊び、散歩、飼育・栽培、製作活動、運動遊び、表現活動、行事など、あらゆる園生活はこのように子ども自身の活動にヒントを得、それを発展

できるような環境を準備していけば良いであろう。ある程度の予想される活動を計画しても、それをフレキシブルに転換できる姿勢と機転が教師には求められるのである。

2. 保育の総合的展開から模索するコンピテントな子ども像

次の事例は、筆者が数年前より全教諭の共通理解のもとに展開してきた年長児を中心とした園生活の流れにおける総合的保育事例の一つである。

事の起りは、園外保育の散歩からであった。兎の餌にはこべを採りながら散歩することを子ども達とよく行なっていたが、ある時、遊歩道のベンチ近くにごみが散らかっているのを見た数人の子が、「片付けようよ」と言い出した。皆でゴミ拾いが始まり、この活動はその後、散歩の度に行なわれるようになった。しかし煙草の吸い殻も多く、素手で拾うには問題もあると思い、ある時、割り箸を利用することを教師が思いついた。箸の使用は素手で拾うより困難点が多いが自分の現能力より少し上の課題（発達のズレ）は、子どものやる気を誘うことになった。教師側が箸の練習とゴミ拾いを結びつけたのである。

（図2）掃除はその後、箒やゴミ袋まで持参する本格的なものへと発展していった。

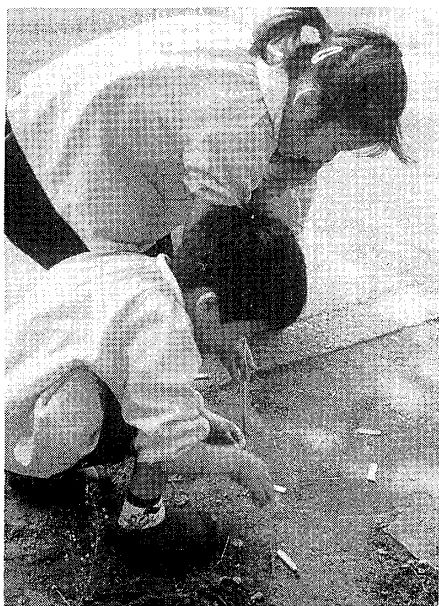


図2 割り箸で吸い殻などのごみを拾っているところ

次に拾ったごみを燃えるごみと燃えないごみに分別しようということになり、直接袋に入れず、それぞれに分けて所定の場所に置き皆で選り分けごみを確認するのである。判断に迷う場合には教師がヒントを与える。その内、燃えないごみに再生可能なものとそうでないものがあることを日常の家庭生活で知ようになった子どもたちから再生可能なものを選び分けようという意見が出てアルミ缶とスチール缶を分別をすることになった。（図3）



図3 拾ったごみを分別しているところ

どうしてアルミ缶は再生できスチール缶はできないのかという疑問が起こり、教師の方も勉強させられることになった。再生ということにヒントを得て牛乳パックを持ち寄り、年賀状用の和紙の作成にも取り組んだ。

また園近くのごみ集積所に指定日以外にごみが捨てられ、鳥が散らかすのを登園時に気づいた子ども達からの発想で、ごみを指定日まで園で預かろうということになった。そして集積所の掃除をしながら、「どうして捨ててはいけない日に捨てるんだろう」「僕は絶対に捨てないよ」などと話し合いながらごみ集積所の掃除もすることになったのである。（図4）



図4 ごみ集積所の掃除

さらに教師の提案で、捨てる人に宛てた注意を呼び掛ける文章を考え、文字の書ける子が画用紙に書いて集積所に掲示したのである。ある時、数人の子が、捨ててあった中古のプレーヤーを持ち込み、直して園で使おうということになったが、残念ながらこれは無理であった。教師はその年の表現発表会にこの問題を劇遊びに発展させることを思いついた。ごみ怪獣が膨れ上がり暴れ廻る状況を子どもと共にストーリー化し、ごみ袋とダンボールで怪獣製作に取り組んだのである。ごみ怪獣が現われる所は実況中継にしようと、教師がビデオをまわし、ナレーター役の子が遊歩道から実況中継する様子を撮り、その中継中に園にごみ怪獣が現われ皆でこらしめるという内容であった。子どもと教師の合同創作劇として大好評であった。(図5)

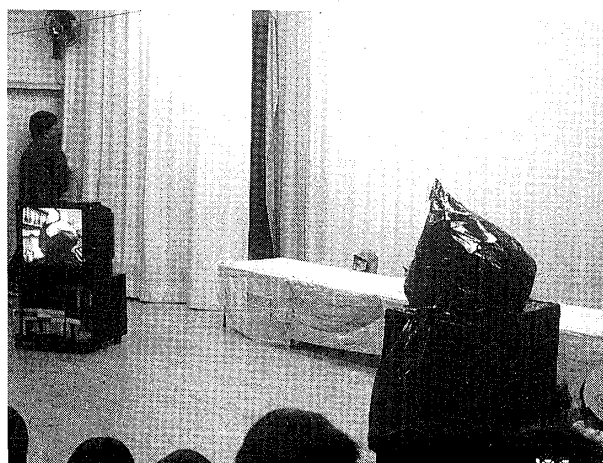


図5 実況中継中にごみ怪獣が現れたところ(発表会)

散歩から劇あそびとなるまで約10ヵ月が経過していたが、子どもの発想を教師側が受けとめ保育活動としてその都度、追い掛けていった状態であった。生き生きとした子ども達のやる気と充実感が手に取るように伝わり、また子どもらしい発想は教師の常識では思いもつかないこともあり、子どもから学んだ保育展開であった。一人暮らしのお年寄りとの交流、手話への取り組み、昔(大正から昭和初期)と今の家庭生活の違い、七夕のプラネタリウム見学後の星座調べなど、その年によって子どもの取り組みは様々に変化するが子ども達のつぶやきや質問に敏感に反応し保育を展開する活動は継続している。ちなみに今年は国立科学博物館の大恐竜展に行ったことから発展し、恐竜ブームとなっている。運動会の恐竜音頭、大型恐竜パズル、恐竜の紙粘土製作、恐竜の名前調べ、と男女を問わず興味が広がった。

幼児だけの活動ではここまでいかないであろうし、また教師が予想する望ましい活動の展開では、他の方向に行ってしまうであろう。子どもらしい発想を具体化させるのは教師の役目である。様々な場面や時代のニュースをヒントとして紹介することにより、次々と子ども達の中から新しい提案が出て、思わぬ広がりを持った保育となる。望ましい活動の展開を教師側が予測することは大切だが、それはくつがえされ変更されていくものであろう。カリキュラムはあくまでも教師側の予測する望ましきへの仮設であり、子どもの活動から次の保育計画をたて再編成していくことにより、子どものコンピテン스가高まり自己形成を助長し、のびのびと日々の保育が展開されることを実感できたのである。

Ⅶ おわりに

ちょうどこの論文を執筆中に学習指導要領改訂(案)のニュースが報道された。(平成10年11月18日)幼稚園教育要領(案)の方は後日資料を入手したので、今回、改訂の全文について検討する時間的余裕はなかった。従って本論文中には、関連する箇所のみ改訂案の最新情報を取り上げることにした。

また本文中では触れなかったが、今回目を引いたのは小、中学校における見直しの方である。知識の量で学力を測る従来型の教育の転換や学習内容の削減がねらいであるという。小学校の新指導要領(案)の総則には、「学校の教育活動をすすめるに当たって

は、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的、基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」とある。また注目されるのは、「総合的学習の時間」である。教科の枠を越えて「生きる力」をテーマとする。知識そのものではなく知識を得る方法、それを生かす方法などを指導するのだという。まさにコンピテンスがテーマとなるということではないであろうか。

コンピテンスの小中学校時代の年令的变化を見ると(図6)学習の領域と自己価値において年齢の上昇と共にコンピテンスが低下する傾向が見られるという。^{註13}アメリカの同様の調査では認められておらず我が国特有の結果であるという。桜井によれば「これは我が国の教育事情が影響していると思われる。受験戦争の中で、自分の学習能力や人間としての価値に失望していく子どもが多いのではないだろうか。」と述べている。

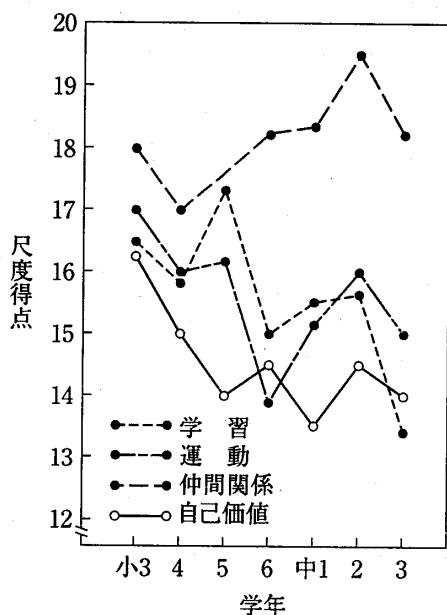


図6. 有能感の年齢的变化(桜井、1983)

1983年の調査であるが、現在においてコンピテンスが高まったとは思えない。むしろやる気をなくし、「自分は能力のない人間だ」「社会に出ても何の役にも立たない」といった自己喪失感を抱き、自ら落ちこぼれようとする若者も多い。エリクソン(前述)の児童期の発達課題には、「自己の不完全さからくる劣等感を克服すること」とある。教育がこの時期、自己の有能性を自覚させるところか、反対に劣等感を強めているとしたら恐ろしいことである。

西暦2002年実施の新学習指導要領においてコンピテンスを持てる中高生を育ててほしいものである。アイデンティティの確立するこの時期に、自己への自信と国際感覚を持った人になってもらいたい。それではなければ、幼児期から培おうとするコンピテンスも意味を持たなくなる。乳児期の母子関係において、幼児期の友人や物との関わりにおいて、さらに小学校における活力ある学習を通して、自己実現する未来の大人を期待したい。

VIII 引用・参考文献

1. 引用文献

- (注1) 「幼稚園教育要領」1989.3.20文部省
- (注2) 同上
- (注3) Hunt, J. McV., The Challenge of Incompetence and Poverty 1969 (宮原英男 宮原和子共訳1978 7.20. 「乳幼児教育の新しい役割」新曜社 P.95)
- (注4) 川瀬良美著1998.1.31「児童の内発的動機づけについての心理学的考察」風間書房 P.4
- (注5) 宮本美沙子他編 1991.6.25 新・児童心理学講座 第7巻『情緒と動機づけの発達』第3章 桜井茂男著「内発的動機づけ」金子書房 p.94
- (注6) 前掲(注3) P.103
- (注7) 前掲(注3) P.107
- (注8) 前掲(注4) P.4
- (注9) 前掲(注5) P.94
- (注10) 前掲(注5) P.102
- (注11) Connolly, K.J. and Bruner, J.S., The Growth of Competence 1973 (佐藤三郎訳編1981.2.10「コンピテンスの発達—知的能力の考察—」誠信書房P.1)

(注12) 前掲 (注5) P.107

(注13) 前掲 (注5) P.104～105

2. 参考文献

- (1) 森上史郎著1988.8.6 「児童中心主義の保育」
教育出版
- (2) 岡田正章編著1984.1.25 現代幼児教育全集
第1巻「幼児教育の課題」ぎょうせい
- (3) 滝沢武久編著1996.5.30 講座 子どもの発達・教育・臨床 第1巻「発達心理学と子どもの成長」 八千代出版
- (4) 河野重男監修 1989.5.1. 「新・幼稚園教育要領と21世紀の保育展望」チャイルド社
- (5) 森上史郎・吉村真理子編1996.1.20.保育講座
第2巻「保育内容総論」ミネルヴァ書房